

War ThunderをVRでやっ  
てたら荒野に放り出さ  
れたんだが

アールド・レナウス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

War Thunderを心より愛し、War Gaming本社を爆破する事を夢見てきた無垢（ただの池沼）な少年は、神（War Gaming本社の仕業に決まってる）の思し召しによってイジツへとぶち込まれる。

陸を愛し、空を愛し、海を愛したがいずれにも愛される事は無かったニート予備軍パイロットは、イジツに嵐を巻き起こす……（多分）

# 目次

その飛行士、池沼につき	1
メッサーはいいぞ	7
グンマーって、すげー！	14
くらハマ直行便く帰りの便？ あ？ねえ	
よそんなモン。	19
ユーハング人をセットで。 サイドメ	
ニユーにはぐれ空賊を一つ	24
noobはつらいよ	31
オ→バ←サンだとふざけんじゃねえよお	
前！お姉さんダルルオ!?	35



## その飛行士、池沼につき

みんな、War Thunderって知ってるかな？

War Thunderっていうのはね、例えば、軽戦車で重戦車をNDKしながらケツを掘ると気持ちがいいとか、Pe-8の5t爆弾でキルログを荒らすのが楽しいとか、大火力で日本機をいじめるのが楽しいという事をWar Thunderって言うんだよ（大嘘）。

素晴らしい事にそのゲームはVR対応で、Oculus RiftとHTC Viveの両方で遊ぶ事が出来る。（ただしPSVR、テメーはダメだ）

それだけでなく、航空戦専用のジョイスティックやフットペダル、スロットルレバーまであるという大盤振る舞い。

これら全てを揃えて航空戦SBをプレイした時は楽しすぎて二回も男汗を出した。

これだけ聞くと一見リアルさ重視なコアなゲーマー向けに思えるかもしれないが、意外とゲーム内容はカジュアルに出来ている。

何処ぞの空飛ぶトーチカの名前のゲームみたいに飛ぶ前から無理ゲーとかではなく、キーひとつでエンジンを動かせるし、細々とした調整も要らないので知識が無くても安

心！

非常に初心者にも受け入れやすい仕様となっている。

さて、新規プレイヤーの勧誘はコレで終わりにして、今は空戦RB、搭乗機はBF1  
09F4！

つまりバトルレーティングは3・7以降。

対連合戦なので相手はスピットファイアかコルセアかイスパノ版マスタングって所  
ですかね。

あ、でもヒトラー<sup>P</sup>ボル<sup>4</sup>ト<sup>7</sup>持<sup>D</sup>つてきてるからもつと上のBRか。

こちらの機体は上昇力が高いのでそれを活かして先に高高度に登りたい所。

今回の装備には追加武装として15mmのガンポを積んでくるので機動力にわず  
かと言えど影響が出ています。

格闘戦は相手を選ぶべきでしょう。

現在の高度は3500ですがどうやら私より上の方にはまだいないようです。

スピットファイアが一番怖いので警戒しているのですが、マップ中央に差し掛かって  
見えない所を見ると、多分マップの端から攻めてきてますねクオレハ……。

やっぱり予想通り、右側から攻めてきてたみたいです。

小基地狙いのBV-238がスピットファイアと交戦しました。

と、思いきやスピットファイア溶けましたね……。

アイツのケツにはつくなどあれ程（ry

離陸から大分経ちまして現在高度5000です。

いい感じに下にいる敵戦闘機が分散してくれているので早速一撃離脱をかまします。射程圏内に入っても、命中が望める位置に着くまで無闇に撃つのは、やめようね！  
どんどん高度が落ちて敵の様子が見えますね。

相手はボーファイターですか、単発機であるBF109の相手ではありませんな。

あつ馬鹿野郎！ 横旋回するんじゃないぞ！！

動くとき当たらないだろお!? 動くとき当たらないだろお!?（ヒエー！）

やつたぜ。

少しAIMがガバリしましたがなんとか敵のボーファイターの尾翼をへし折る事が出来ました。

低空にいる重戦闘機は貴重なタンパク源<sup>経  
験  
値</sup>です。

自然の恵みに感謝です。（BAGRLS並感）

ヌツ！ どうやら後ろに戦闘機がくつついて来たみたいですね。

しかし急降下後の私とはかなりの速度差があるのでこのまま高度を取って一気に引き離してしましましょう。

相手はコルセアみたいですね。

速度差が無かったら多分負けてました。

て、ん？ 何か撃つてきた……………？

アッ！（スタツカート）

ま、まさかこの距離でエンジンぶち抜いてくるとかニュータイプか何かか？

完全にエンジンが停止してしまいました。 まずいですよ！

あつ……（諦観）ダメみたいですね……。

アムロ感激イ！（爆死）

まさかあんな所で殺られてしまうとは…………仕方ないので次はヒトラーボルトで遊び

ま…………ん？

おかしいですねHMDの画面が唐突に消えましたね。 停電かミ？

でもヘッドフォンからは普通に音が聞こえるので停電ではないですね。

ヘッドフォンから聞こえてくる音も変にくぐもって聞こえて来ますね…………そろそろ

買い替え時でしょうか？

ていうか聞こえてくる音もホーム画面にいるのに戦闘機のエンジン音だしこれまさ

かゲームそのものがバグってる？

それにどうでもいいけどなんか椅子が固いような…………？



折角大金叩いて買ったのにボツタクリやろこれ！

取り敢えず何も見えないのではどうしようもないのでHMDを外しましょう。

……………自分の部屋ってこんなに狭かったかな？（すつとぼけ）

一畳も無いんだけど。

いやていうかここコックピットの中だよね!!

そらエンジン音も変な風に聞こえてくるわな！

何なの？ 新手の異世界転移？

最近のラノベは主人公をゲーム中に戦闘機だけ渡してこんな荒野のド真ん中に放り

出すの!?

ふざけんじゃねえよお前!! もう許せるぞオイ!!

ん？ なんか視界の両端にありますね……。

これってWar Thunderの空戦の時のレーダーとチャットに計器類まであ

るやんけ！

しかもこのコックピット、なんと何故かキーボードが備え付けられている。（意味不

明）

これって……もしかして……もしかするかも知れませんか？

やっぱり動くじゃないか（歓喜）

このキーボード、どうやってかは分からないけどこの戦闘機と連動してるみたいで  
す。

War Thunder同様に操作することが出来る模様。

という事はまさかこれは新世代のフルダイブ型VRか!?

俺はいつの間にかそのテスターになっていた? (池沼)

……なんかレーダーにめっちゃ写ってるうー!!

数えるだけで五機はいるう!! しかも赤表示という事は敵じゃないか!!

誰がてめえなんか! てめえなんか怖かねえ!!

野郎ぶっ殺してやあああああああああああああ!!!!!!

フルダイブ型VRテスターの先駆けとして、キ〇トみたいに無双してくれる  
わアアアア!!

って相手九六式艦上戦闘機やんけ!!

BF109F4とBRの差酷すぎやろ!!

# メッサーはいいぞ

唐突だけど皆九六式艦上戦闘機好きかい？

俺はというと嫌いではないんだけど……War Thunderじゃ研究すつ飛ばして九七式戦闘機しか乗ってないんだよね。

新規プレイヤーの勧誘で見事リア友をWar Thunderに引きずり込むことが出来たので低BRのデッキを作る為に最近開発始めてただけど、なんだかんだ言つて格闘戦し放題の低BR帯の戦場が一番楽しいと思いました。（小並感）

今ゝ馬力とかゝ機銃だとかゝ

いらなゝいゝけどゝ

装甲がゝほしゝいゝ（日本機乗り並感）

『装甲をください』作曲 俺

つてこんな事言つてる場合じゃないんだよなあ……。

その九六式艦上戦闘機五機に現在追い回されています。

だったらなんでこんなに落ち着いているのかというと、コイツらやけに動きが鈍いしエイムも下手くそなんだよね。

多分だけど、War Thunderのbotの方がまだ強いと思う。

ちよつとした回避機動を取るだけで相手は着いていくだけで精一杯らしい。

そんなんで戦闘機乗りとか笑っちゃうぜ！（特大ブーメラン）

でもマジでそう思うくらいに敵機トロすぎるんですがそれは……（困惑）

多分このまま反転して反撃も出来ると思いますが、私は平和をこよなく愛する平和主義者（大嘘）なのでここは逃げに徹します。

旋回で速度失うのやだし。

じゃけん緩降下で速度稼ぎましようね。

おーおー、ただでさえ距離を離されつつあった九六式がもう既にあんな所にいるぞ。

生まれた時代が違うからね、しょうがないね。

あつ、九六式が反転してどっか行つた。

まあ九六式でメッサーに追いつくとか無理ゲーだから諦めるのが普通だよな。

そんなこんなで何とか敵機の襲撃からは逃れる事は出来たのだが、問題はその後だよな。

戦闘機が普通にいたからここから数百キロ圏内には人が住んでいるとして、着陸出来る場所が欲しい。

あとセブンイレブンとコストコと美味しいラーメン屋があつたら最高（圧倒的無茶ぶ

り)

それは仕事からの帰りがけの事だった。

編隊を組んで飛行場へと帰還すべく西へと飛んでいた時にそれは現れた。

奇妙な塗装の施され、見たことも無いエンブレムが描かれたその戦闘機。

最初は飛燕と見間違えたが、主翼の形状が明らかに違うし、キャノピーも角張った形状をしていた。

《なんだあありやあ?》

《飛燕じゃないのか?》

《どのみちこんな所で一人で飛んでる時点でカモだ!落としちまおうぜ!》

弱者を見る途端に猛り出すのが俺の部下の悪い所だった。

無線で止めようとしたが、声を出す前に部下達は既にあの不明機に襲いかかっていた。

「あいつら……!」

仕方なく部下達に続いて不明機の後ろにつく。

他の四機はやたらめつたらに発砲しながら距離を縮め、確実に当てられる距離まで接近した。

《よっしやあーこれで撃墜スコアは俺のもんだ!》

そう、今までならばこの一撃で撃墜出来ていた筈なのだ。

未だに無傷であるその不明機の動きを俺達は完全に捉える事は出来なかった。

《な、なんだ今の動きは!》

《アイツ……化け物かよ!》

機動自体は普通にバレルロールだった。

ただ問題はそのやり方だった。

まずは一射目を左方向へのバレルロールで回避し、そこから一秒足らずで更に右方向へもう一回バレルロールを行った。

そこから上方向、下方向へのバレルロールを何回も連続で行ったのだ。

しかも無闇に行われたのではなく、まるで俺達がどの射撃位置にしているのかを予め知っていたかのように回避機動を取っていた。

いつの間にか不明機は速度を上げて俺達との距離を引き離し始めた。

《クツソ逃がすか!》

部下も負けじと追い掛けるが、九六式とあの不明機とでは明らかな速度の差がついていた。

「それ以上はよせ!燃料が無くなるぞ」

漸く部下は攻撃を諦め、反転した。

帰還途中、空の彼方へと消えて行く不明機を見て、何故か安堵してしまっていた。

第一村人を振り切つて、それから更にしばらく飛んでいたのですが……。

人間は誰一人いませんでした……。

いやー何がいけなか《その不明機！》つてちよつといきなり話しかけないでよ。無線で話しかけて来ましたね。

折角の第二村人なのでこちらにも返答しましょう。

あーあー！えーつとー？ 聞こえるかなー？

《ああ、聞こえている》

無線は通じてるみたいですね。 やったぜ。

《不明機、お前を飛行場まで誘導する。 話はそこで聴くからくれぐれも馬鹿な真似はするなよ》

うん、おかのした。

馬鹿な真似はするな……ですか。

確かにレーダーを見るといつの間にか三機ぐらい後ろにいますね。

という事は真ん中にいるのが無線の主かな？

機種はいずれも一式戦闘機三型ですか。

なかなか珍しい物を……。

兎に角ここはあちら側の指示に従った方が良さげな感じがしますね。

《では、飛行場に誘導する。着陸が難しいから事故るなよ》

つてあの隼急降下して何処に行くんですかね。

谷の間に入って行ったのでそれに続いてイクゾー！ デッデンデデデン！カーン

！（セルフ効果音）

カーン！が入っている＋114514点（自己採点）

確かにえらい離着陸が面倒な場所にありますね……飛行場をこんな谷底に作るとか

頭おかしい……。

おじやましーす（着陸）

おや？なんか銃持った男達に取り囲まれてますね。

お祭りかな？（すつとぼけ）

おつとあの赤い隼達も降りて来ました。

中から変なオッサンが出て来てキャノピーを開けと言ってくるので大人しく出てき

ましよう。

はえーすつごい大きい……（飛行場）



谷底にこんな要塞が作られているとかやっぱり天才じゃないか（熱い手のひら返し）  
「俺はエリート工業のトリヘイだ！さっきお前が『穴』から出てきたのを哨戒機が見たんだよ！お前ユーハング人だろう！なあお前ユーハング人だろう!!」

夕飯夕飯うるせえ！

食べ盛りにも程があるだろ！俺はオカンじゃねえぞ！

それと穴ってなんだよ。

世界に穴は一つも無いから（正論）

## グンマーって、すげー！

トリヘイって誰だよ（ピネガキ）

「おいおい、俺はイジツ中に名を馳せたエリート工業の社長……ってユーハングから来たお前にや分からんか……」

なんでこの人勝手にはしやぎ出して勝手に落ち込んでるんですかね……？

陰キャ時代の俺みたいだあ……（直喻）

そろそろ降りたいんですけどまだ時間かかりそうですかね。

え？ 降りていいの？ じゃ遠慮なく。

おじやましーす（入室）

まるでアリの巣みたいですねクオレハ……。

ホントにどうやってこんな要塞作ったんですかねコイツら……？

つと、案内されて辿り着いたのは尋問室……ではなくただのゲストルームでした。

（安堵）

座っていいと言われたので有難くソファアに座らせて頂くと、トリヘイさんも向かい側のソファア座りました。

ですが、何やらトリヘイさんの様子がおかしいですね。

凄い顔を顰めてるけど、病気なの？（JNCNR）

「ああ……すまん。で、本題なんだがお前はユーハング人で間違いないよな？」

だからユーハングってなんだよ（素朴な疑問）

「ユーハングてのはだな、うーむ、簡単に言えばこことは違う異世界って事だな。俺た

ちの持つてる航空機もユーハングから来たんだ」

航空機……あれは一式戦闘機三型だった。

その前に交戦したのも九六式艦上戦闘機……どちらも日本機。

そして異世界……。

……ハッ！まさか!?

ここはグンマー帝国だった……!?!?（池沼）

成程、であれば日本機がいてもおかしくはありませんね……。

分かったぞ……! 全ての謎が解けた!!

だったら俺はユーハング人で間違いないな！

トリヘイさんがグンマー帝国臣民だったとは！同じ列島で暮らす者同士仲良くしよ

うではないか!!

「お、おう……よろしく……」

しかし飛んでいた時は一面が荒野で緑なんて一切見えなかったな。

まさかグンマー帝国の皇帝は空間操作で国土を小さく見せているのか？

グンマー帝国だったら有り得るな……。 (有り得るわけないだろう！ いい加減にしろ！)

「まあ、お前がユー・ハング人って事は確認出来たな。 お前ここに来る時穴を通ったただろ？」

いや、ただHMD外したら荒野にほっぽり出されてただけなんですが……。

あ、でもグンマー帝国は文明レベルが違いすぎるからHMDなんて言っても分からないか……。 しょうがない、ここは適当言って誤魔化そう。

あゝそれね？ あの穴自分で開けたんですわ。(イキリキツズ)

「……は？」

あつやべ、調子乗って口が滑り過ぎちゃった。

やばい、ドン引きされてるう！

でもまあいつか。(危機感ゼロ)

こんな戯言真に受ける人なんていないだろうし、つまらないジョークとして受け取ってくれでしよ。

「……ま、まあこの話は後にして……」

なんかすごい歯切れ悪くなってるう!?

俺の渾身のジョーク（大嘘）そんなにつまらなかったの!?

泣けるぜ。

「……最近な、穴の出現数が日に日に増えて来ているんだ。しかも開く度に穴の向こうから変な見たことも無い戦闘機が飛んでくる。各地の街でそいつらは保護して情報を聞き出す事になってたんだがな……出現数が多くても場所はランダムだからなかなか捕まえられなくて、逆に空賊に捕まったり、どこかで墜落して死んでるケースもあるんだ。だからお前らの保護は各地で最優先となつて俺らの所にもその話が来てたんだ」

ふむふむ、そしてちょうどその時に俺が来たと?

「そういう事だ。でも俺らじやお前を丁重に扱うのは難しいからここから少し離れたところにあるラハマという街に行つて欲しい。勿論案内はする」

ふーむ……何やらおゝもゝしゝろゝいゝことゝになゝつゝてゝまゝすゝねゝえゝえゝえゝ。

ラハマだな。きつとこれから大冒険が始まるに違いない!

ほらいくどー。

「まあ待て待て。 疲れてるだろうしここに泊まってけよ。 それにお前の機体だって補給が必要だろ？ 飯も部屋も用意するぜ」

あゝいいつすねえ。

お泊まりとか婆ちゃんちに小学生の頃に泊まった時以来ですねえ！（隙自分語）

「じゃ、もうすぐ昼飯が出来る頃だから食堂に行くぞ」

イクゾー！デッデンデデデデン！

カーン！が入ってないやん！——1145141919810931893点（自己批判）

「ラハマ直行便」帰りの便？ あ？ねえよそんなモン。

トリヘイさんに案内されて着いた場所はまあまあ広い食堂。

近くのテーブル席に座らせられるとトリヘイさんは料理を取りに向こうへ行ってしまった。

一人残された俺、超好奇の視線に晒されています。（心拍数114514）

やべえ！皆食事中断してめっちゃこっち見てるううウ！！

早くトリヘイさん来てくれ！

アカンこれじゃ心臓発作で死ぬう！

「待たせたな。ほれ」

生きてるうう！（セルフ生存確認）

トリヘイさんが持ってきたこの料理……タコス？

タコスなんてあるんだなこの世界。

「ん？タコス知ってんのか？」

そうだよ（肯定）

この前家で作って食べようとしたら勢い余ってタコスの中にある具材を前方へ射出

して机をチーズと肉とキャベツ塗れにした事があるからな（心の声）

「こいつはウチの社員が作った奴でな、ほらあそこにいる奴。 エドアルドって言うんだ。 俺達はアイツの頼みでラロって呼んでる」

へーエドアルドさんか。

……なんか白人だらけのこの食堂で肌の色といい顔付きといいあの人めっちゃ目立ってるな。

黄色人種の俺も同じか。

ていうかあの人絶対メキシコ人かそれに近い人だよな……?」

「そうだ、そういえばお前の名前を聞いてなかったな。 なんて言うんだ?」

名前……本名でも良いんだけど……そうだ、War Thunderの方の名前にしよう!

俺の名前は………

『スカ・ブリャト』だ!

---

スカ・ブリャト。



そいつはそう名乗った。

エドアルドもそうだがイジツじや中々に珍しい名前だ。

ユーハングではこのような名前が当たり前なのだろうか？

ブリヤトは二つのタコスをあつという間に食らいつくし、俺の話にただ耳を傾けていた。

最初は明日の出発時間とか、ラハマに着いた時の事とか大事な話をしていたが、最終的には酒が回ってきたのもあつてただ二人で駄弁っているだけだった。

ユーハングには学校とか言う場所があるらしい。

国……街の上位互換的な所が親の代わりに金を払って子供を学校で学ばせる義務教育という制度があるんだとか。

羨ましいものだ。ここにもあつたらウチの社員を纏めてぶち込んでいる事だろう。

だが、ブリヤトは好きか嫌いかで言えば嫌いと言っていた。

ユーハングでも色々あるのだろう。

---

あーたらーしーあーさが来た。

きーぼーのーあーさー。

という事で、出発の日がやって参りました。

朝っぱらから早速滑走路に私の愛機と共に一式戦闘機三型が並んでおります。

「なあ、ブリヤト」

ん?

「昨日ブリヤトの戦闘機を点検していた時にウチの整備員が違和感に気付いてな」  
違和感……やっぱりここリアルだからどこかしら壊れてたのかな?

「いや壊れてたんじゃなくてな……何故か燃料が満タンだったんだ」

成程、確かにそれは奇妙だな。

いや待てよ……。

俺の戦闘機って何だかWar Thunderのシステムに基づいて動いてんだよね。

操作感もまるで変わらないし。

つまり……もしかすると……ココってWar Thunderという飛行場の判定なのか?

だとしたら燃料が満タンなのも納得出来る。

まさか飛行場システムまで用意してくれるとはご親切なことだな。

「どうした? もしかして何か知ってるのか?」

いや? 多分誰かがこっそり入れてくれたんでしょ(すつとぼけ)

「うーむ、まあいいか。それはそれとして、早く乗るぞ。なるべく午前中にラハマに着いておきたいんだ。空賊の活動も活発化してきてるからな」

おかのした（搭乗）

他の皆はコックピットの中でなんかカチャカチャやってますねえ！

まあこっちはキーひとつでエンジン始動するんですけどね（ドヤ顔）

なんか皆が凄い驚いた目で見て来てますね。

そりやそうか（納得）

「イナーシャハンドルも無しにエンジンが……」

「ユーハングの戦闘機は凄いな……」

いやあそんなに褒められなくても（お前じゃねえよタコ）

おつ、無線が繋がりましたね。

《聞こえるか？ 俺達が先に離陸するからブリヤトは着いてきてくれ》

オッスお願いしまーす！

《よし、じゃあ行くぞ！》

イクゾー！（離陸）

## ユーハング人をセットで。 サイドメニューにはぐれ空賊を一つ

ぬわあああああああああああああんな疲れたもおおおおおおおおん!!!!

もうかれこれ何時間飛んでるんですかね……。

座席が硬いからおしりが痛い……。

俺のケツマン壊れちまうよ……。

それに暇すぎる。

かと言って操縦放棄して寝る訳にもいかないし。

同じ風景が延々と続く中何時間も飛行するとか拷問かな？

そろそろラハマに着いて欲しいんですが……。まーだ時間かかりそうですかね。

《安心しろ、あと一時間くらいすれば着くはずだ》

ファツ!! ウーン…… (意気消沈)

このままだと暇過ぎて死ぬナリ……。

そうだ、大声を出して気持ちを紛らわすナリ!

!!!!!!

(いつものBG

M)

《ど、どうしたんだブリャト、急に大声出して》

い、いやなんでもな《社長！二時の方向に不明機を視認！》

おっ？やっといイベント開始か。

《数は!?!》

《四機です！まだ機種は確認できませんが、全機戦闘機かと！》

《全機、戦闘態勢を取れ！ブリャトもだ！》

おかのした。

レーダーに映りましたね……ってあれ？

敵じゃなくて味方として表示されてますね……。

ってん？ 今度は視界の端でなにか動いたぞ？

coffee beans:YO その機体、お前も俺達と同じだろ？

ファツ!?! チャットになにか書き込まれてる!?!

そうだ(閃き)、こつちも返信してみるか。

キーボードあるんだし。

Cyka Blyatl14514:お前、もしかしてあそこにいる戦闘機？

あつネームタグ見えた。 先頭から順番にF4Uコルセア、F4Fワイルドキャット

が二機、それとそこに日本機の零戦二一型が一機で何故かそいつだけネームタグが表示されない。

coffee beans: そうだぜ、コルセアに乗ってるのが俺だ。 後ろにいるの  
はゼロを除いて二機とも俺の分隊員。

jelly Donut: Hello mother \*\*\*\*\*.

Holy Jesus: Hi, jelly Donut はあんまり気にしなくていいよ。  
これが平常運転だから。 もう既に四回通報されてるし。

あれ? この人たちつてももしかしくても外国人か?

日本語使えるとか凄いつすね。

coffee beans: いや、どうやらここでは人種関係なく全員自分の国の言語に聞こえるらしい。 何故かは知らんが。

はえ。

《おい・アイツらこっちに来るぞ!》

攻撃が来ると思ってたトリヘイさん達は身構えましたが、普通にこっちの編隊の横に引っ付いてきただけでしたね。

あれ? ちよつと待って!

coffee beans: …コルセア……………。

転移する直前の記憶

パイロットが気絶しました

あなたを撃墜したプレイヤー coffee beans (F4U) la コルセ  
ア)

s  
へ

人 人  
| 人 人  
coffee bean

? Y ^ Y ^ Y ^ Y

?

.....ハッ!!

お前かああああああああああああああああ!!!!

なんつー再開だよ!!

運命的過ぎるわ!!

今日はエリート工業が保護したというユーハング人が来ると言うので飛行場は少し  
慌ただしくなっていた。

滑走路は彼らを迎え入れる為に空いており、一機たりとも滑走路に入れるなどの事らしい。

滑走路の脇で隊員達と共に彼等が来るのを待っていたが、来る気配は無く、刻一刻と時が時が過ぎていった。

あまりに時間が経ちすぎて端でチカが撒き散らしていた文句も収まって静寂に支配された飛行場。

もう戻ろうかと思い始めたタイミングで、遠くからエンジンの音が聞こえてきた。

音の方角を見ると複数の機体が太陽光を反射して光っていた。

しかし、よく見ると機体の数がおかしかった。

「なんか三機多くない？」

「ここに来るのは一機だけでは？」

護衛機が三機とブリヤト一機に加えて更に三機いる事に彼女らは疑問を覚えた。

やがてその七機の戦闘機は滑走路に着陸し、それから順次滑走路の脇に機体を停めて中のパイロットが出てきた。

そこにはエリート工業の護衛機とイジツではよく見かける戦闘機、零式艦上戦闘機二型に加えて見た事の無い戦闘機が四機並んでいた。

一機は胴体が細く、逆ガル翼が大きな特徴だ。



二機目と三機目はずんぐりとした胴体で不格好に思えた。

残りの四機目が一番格好良く見えた。

液冷エンジンを積んだスラツとした胴体に角張った主翼と風防。

そして何よりも彼女達の目を引いたのはその戦闘機の塗装だった。

見た事の無いエンブレムが胴体両側面と主翼に描かれ、これまた見た事の無い文字があった。

更に機首にはシャークマウスが描かれていた。

こんなにノーズアートがてんこ盛りなのはあの戦闘機だけだ。

「これは……凄いな……」

その圧倒的自己主張の激しさに彼女は瞠目した。

本来ノーズアートというのは敵機への視認性を高めてしまうので余程のエアスパイロットでもない限り描く事は無かった。

事実上のエース部隊であるコトブキ飛行隊でも大層なノーズアートは描かないようにしていた。

それを彼の機体にはベタベタと至る所に描かれているのだ。

まるで見つけて下さいと言っても言っているかのように。

いや、見つけて下さいと言うよりも、どちらかといえばこれ程のノーズアートの墜とせるものなら墜としてみろ

と言っている方が正しそうだ。

他の戦闘機のパイロット達と話している彼を見ながら、彼は間違いなく自分達の予想を超えるエースパイロットだと確信した。

## noobはつらいよ

ラハマでブリヤト達がワツチャワツチャしている間、ずっと遠く離れた空でまた一つの物語が動き出していた。

「ふつつぎけんじゃねえぞ!!! 糞マッチングにも程があるだろ!!」

逃げ惑う一機の戦闘機、He-51とそれを追い掛ける五機の零式艦上戦闘機一型。

運動性能以外の全てが劣っているHe-51は零戦の7.7mmにペチペチされながら雲の中を急降下中。

装甲なんてないHe-51にとっては7.7mmも充分脅威である。

オイル冷却装置にも一発被弾したらしく、エンジンが爆熱と化していた。

液冷エンジンを積む戦闘機で一番避けねばならないのは被弾だ。

高馬力な上に空気抵抗も減らせる液冷エンジンは空冷エンジンと比べて被弾に弱く、一発でも致命傷になりうる。

「チクシヨオオ! ドイツ空軍ツリー始めたそばからこれかよ!! こんなことになるんだったら事前に買ってたサンボル<sup>P147D</sup>で出撃してればよかったぜ!!」

零戦の射撃を紙一重で躲しながら雲の下へと飛び出す。

地上を埋め尽くす荒野を目にした彼は一瞬目を見開いたが頭上を掠める曳光弾に目を細め、更に回避機動を取る。

最近の異世界転移は随分と不親切なんだな！と心の中で悪態をつきつつも操縦桿は決して手放さない。

だが、零戦も諦める事無く後ろにつき続ける。

機体へのダメージは蓄積し、いつ墜ちてもおかしくない状況だ。

自らの限界を知り、死を覚悟したその時、先程まで殺す気で追って来ていた筈の零戦が突如雲の中へと引き返していった。

死を避けられたことに安堵する彼だったが、今度は自分のすぐ真下からエンジン音が聞こえてくる事に気付いた。

機体をひっくり返し、下の様子を見た彼は零戦達が引き返した理由を知った。

「おいおい……BV-238!? それも四機かよ!」

空に浮かぶそのクジラの如き巨体は四機の編隊を組み、空を悠々と飛んでいた。

◆◆◆◆

オッハアアアアアアアアアア!! (クソデカヴオイス)

ラハマに着陸して早々にコーヒー豆達にデカールデイスられたゾ……。

悲しいなあ……。

確かにデカールベタベタ貼りすぎだけどエース機っぽく見える……見えない？

見えない？ アツハイ。

さてと場所は変わりましてなんか会議室みたいな所に集められました。

着陸した際に出迎えてくれたネーチャン達は綺麗に整列して待機しているけど戦場を同じくするコーヒー豆達はそんな空気を談笑で見事に台無しにしています。

しかもお隣の気の強いジェリードーナツさん（惑星民にしては珍しく女性）がやたら絡んでくるんですが何かしましたかね俺……？

撃墜数？ そんなのいちいち数えてるわけ無いダルルオ!?（一年近くやってて600ちよつとしか落してないだなんて口が裂けても言えない）

「ケツ、自分の撃墜数も覚えられねえのかよ。じゃあレベルは幾つだ？」

レベルは確か……28でしたね。

前のアカウント不慮の事故で消えたし、新しいアカウント作った後も飽き性で一時期サボってたからね、しょうがないね。

ああ……クランでチーム組んで仲良く戦ってた時が懐かしいなあ……。

今？クラン未所属フレンド0のバリバリソロプレイヤー（という名のぼっち）ですが何か？

「……いーじ、じゃあお前の空戦RBの愛機は!?」

ヌッ!急にジェリードーナツさんの表情が変わりましたね。

腹痛かな?

俺の愛機は勿論BF-109F4………と見せかけてFW190A4ですね!

ランクIIでの戦場を支えてくれたアイツには感謝しかありません。

撃墜数も覚えている限りではアレが一番多かった筈。

初めてのマウザー砲もあれですし、思い出深い機体なので今でもデツキの中にあるぞい。

「そ、そうか………やっぱりか………」

お、どうかしました?

「いや、何でもねえ!」

「……もうすぐ町長とマダムが来る。静かにしてくれ」

おっと、赤っぽい髪の新チャンに怒られてしまいました。

ここは大人しく引つ込むとしましょう。

って言ったそばから来ましたね。

一人はただのオッサンと………何だこのオバサン!?(驚愕)

オ→バ←サンだとふざけんじゃねえよお前！お姉さん  
ダ  
ルルオ!?

目の前の女性を見て出てくる言葉は一つ……。

何だこのオバサン

「何か……言ったかしら？」

ヴェー！マリモ!!（；owO）

まあまあ、こんな所でふざけてる場合じゃないし、ちゃんと話は聞こう……。

……ふむふむ、ここでの待遇はトリヘイさんの行っていた通りだな。

情報を纏めるとあのオバサン……じゃなくて女性はマダム・ルウルウという名前だそうで、あのオツサンはこの町の町長らしい、何故か名前は名乗らなかった。町長と読んでくれとの事。

それと彼女達、コトブキ飛行隊についても教えられた。

どうやら六人にそれぞれパーソナルカラーがあるらしい。

ポケモンかな? (にわか並感)

全員女性だが、かなりの腕利きらしく、部隊総撃墜数は300は軽く超えているらしい。

現実でいえば確かに立派なエース部隊ですねぇ。

惑星には一人で一個師団を軽く超える損害を与える奴がわんさかいるなんて知ったら彼女等はどうなってしまうのだろうか……?

俺以外にも惑星民はいるらしいし、そいつらと戦闘になる可能性もあるなぁ……。

しかも多分ここランクとかBRとかお構い無しだろうから下手すればジェット戦闘機と交戦する可能性だってある。

一応、スウェーデンツリーに課金機体のJ29Dがあるけどジェット戦闘機の経験が浅いから負けるかもしれない。

F4 ファントムになんて来られたらラハマは為す術もなく火の海になるだろうなぁ。

こわいなーとづまりすところ。

とまあ、それは後にして本題はここでの暮らし方なんです、宿はあるので衣食住は取り敢えず確保出来るようです。 やったぜ。

だけど、戦闘機のパイロットって事で有事の際は共に出撃して戦って欲しいとの事。



え？やだよって言うとしたら他の三人が承諾してしまったので断りにくくなって仕方なく承諾しました（半切れ）

◇◆◆◆◆

空を悠々と飛ぶクジラの群れに、彼は呼び掛ける。

Aluda：おい、チャットが見えるか？

数秒後に返信が返ってきた。

Apple boi：聞こえてるぞ、さっきは大変だったな。

Grand：お前も俺達と同じか、ホントに何が起きてるんだろうな。

チャットで返信が来たと同時に編隊がスモークを焚き始めたので本人で間違いは無いようだ。

BV—238。

それはドイツ空軍ツリーに存在するプレミアム機体の一つであり、爆撃機である。

特筆すべきは六発のエンジンを搭載したその巨体と、巨体に見合った恐るべき対空火力だ。

その火力の高さは、頑丈な双発戦闘機ですら呆気なく蜂の巣にされてしまう程。

また、爆装も充実しており、小基地を二つは軽く破壊できる。

これらの性能のお陰で今も尚、研究やクレジット稼ぎに多くのプレイヤーから愛用さ

れている名機だ。(惑星の中では)

そんなの奴が四機もいたら、相手側はスパムだのなんだのと言ってブチギレること間違いないし。

Aluda: アンタらも気付いたらここにいたって感じか?

Wooper: そうだな。イベントの任務こなしている最中に寝落ちしたらこのザマだ。

同じ境遇の人間と出会って安堵するアルーダ。

勿論それもあるが、何よりもあのBV―238が四機もいる事が最も心強く、頼りがいがあった。

速度を維持しつつ、右端のウーパ―の機体の隣に自分の機体を付ける。

しかしまずい事にオイル冷却装置がイカれてしまっているので間も無くエンジンはオーバーヒートを起こすだろう。

Apple boy: かなり手酷くやられたな。

Garand: 近くに飛行場でもありやあ良いんだけどな。

caiman2579: おい、なんか向こうに街みたいなのがあるぞ。それに地形があそこだけ平坦だから着陸出来るかもしれないねえ。

本来水上機であるBV―238は地上ではなく名前の通り水上に着水する物なのだ

が、そんなこと惑星では関係ない。

なんなら空母にだって着陸は可能だ。

水上機で着陸なんて出来るのだろうかと考えながら、アルーダは遠くに広がる街を見つめた。